元臆病者の辿る道

パンチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
元臆病者の辿る道

【Ｎコード】
Ｎ６７５２Ｚ

【作者名】
パンチ

【あらすじ】
命惜しさに運命を乗り越えて生き残っても結局は転生させられてしまう。でも夢の不老不死と他のチートで内心嬉しい。そんな男の物語

設定（※ネタバレ含みます）

設定

ハルファス・フォン・アインツベルン

性別：男性
一人称：僕
大切なもの：家族
苦手な人：『青』のあの人

銀髪碧眼のイケメン（笑）。
二次小説のテンプレオリ主みたいだが鈍感の呪いはついていない。
ゴキブリ触角もあるよ。

性格は精神ＥＸのお陰か元々か、冷静。
家族の為なら殺人も余裕でこなす。
最近の悩みはキャラ崩壊し始めたアイリ。

パラメーター（Ｆａｔｅ風）
【筋力】Ｅ　【魔力】Ａ＋
【幸運】Ｃ　【耐久】Ｅ
【敏捷】Ｅ　【宝具】Ｂ

【保有スキル】

精神ＥＸ

これがあれば恐怖や痛みによる精神崩壊は何それ美味しいのレベル。
腹ペコ大王やギルの前でも余裕でタメ口きける。

魔術：Ａ

ゼルレッチの記憶していた内容の魔術をそのままコピーして受け取った。

魔法：ＥＸ

魔術と同じくゼルレッチのものをそのまま。
第二魔法の運営に関してはバッチコーイ。

錬金術：ＥＸ

あらゆる世界の錬金術の知識。
その結果なのか神のおまけなのか某錬金術師達の真似ができる。
賢者の石があれば法則無視で練成し放題だぜヒャッホー。

不老不死

その名の通り。
不老によって１５～１７歳で成長限界を迎える。

不死殺しは利かない特別仕様。

超速再生

ぶっちゃけこれが一番のチート。
傷を受けた傍から再生する。
チリ一つ残さず消されても再生する。

所持魔術礼装

宝石剣

いわずと知れたチート武器。
決してゼルレッチさんからパクッたわけじゃないんだぜ？

賢者の石

某錬金術師達が求めたモノと性能的に大差はないが、中には誰もいませんよ？
法則無視して錬金を行える。

身体能力はゴミ。
一般人と比べてもそこら辺の少年ととくに変わりなく、英霊なんか

と比べた日には土下座もの。
故に、その場を動かず宝石剣による弾幕ゲー、ないしは錬金術で攻撃。
防御や回避を完全に捨てた、ある意味捨て身戦法の極致……って言えば格好良く聞こえる不思議。

プロローグ（前書き）

前作があったのですが、何故か消えてしまったので新作となります。

プロローグ

目の前で一人の少年が横断歩道を渡っている。
信号は青、だがもう少し向こうからは信号が赤にも関わらずスピードを落とさずに走ってきている大型トラック。
少年は不意にトラックの方を見てキョトンとしている。
自分に何が起ころうとしているのか分かっていないのだろう。
今から走って少年を突き飛ばせば助けることが出来るかもしれない。

「まぁ、僕はそんなことしませんけど」

その呟きの数秒後にドゴン、と衝突音が響き渡った。
恐らく少年はそのままトラックに轢かれたか、どこかの勇気ある人が身代わりになったかだろうと推測して帰路につくことにする。

助ける？　生憎だけど僕は自分の命を見ず知らずの誰かの為に捧げるような事はしませんよ。
まぁ、ファンタジーに不老不死だとか、トラックに轢かれても無事な体ならば考えるけどねぇ。

「おい」

「……」

可笑しい。
僕の目の前に一人の少年が上目遣いで此方を睨んできてるんですが、その少年は僕の記憶違いでなければ「先程横断歩道を渡っていた少年」なんですよね。

そうか、きっとどこかの親切な誰かに突き飛ばされたりして助けて貰ったのだろう。
うん。きっとそうだ、そのはずだよ。

「おい」

「何かな」

そういうと少年は自分を指差して「ん」とか言うとそのまま道路に飛び出ました。
これは状況は少し違うけど、殆んどさっきと同じ状況。
アレですか、この子はアホの子ですか。
なんで折角助かったのに再びこんなことするんですか……。

ドカッ

「うぇ、また大型トラックか。暫くお肉は封印決定っと」

少年？　轢かれましたよ。
迫り来るトラックよりも僕が此処から一歩も動かなかったことに驚愕してた様に見えないこともなかったけど、そんなわけ無いですよね。
取りあえず合掌。
成仏して下さい。
化けて出ないで下さい。
枕元に立たないで下さい。

「よし、今日の夕飯はクリームコロッケにでもしようか」

幸い周囲の人は最初の現場に注意が行っていたのか僕に気付いてい

る人は皆無だし、騒がれる前に自宅に避難避難。
そんなことを考えていた時期が僕にもありました。
現場から一歩踏み出した瞬間に足場が無くなり、何時の間にか宇宙空間の様な場所に居ました。

「ほぇ？」

いやいやいや。
駄目だって、何かこの先の予測ができてしまうから。
そもそもあの少年が再び現れた時点でぶっちゃけ大体察してましたから。
ほら、目の前からさっきの少年に酷似した誰かが近づいてくる。

「おい」

なんなんだろう、この子は登場してから「おい」しか言ってない気がする。

「少年、もしかしてアレですか。神とかそういうのですか？　本来は僕が貴方を助けて転生させてあげますって言われて転生する予定だったとか？」

「分かってるじゃねーか。なのに何でお前俺を助けねーんだよ。お陰で二回も轢かれたじゃねーか馬鹿野郎」

「いやいや、僕は一般ピーポーだから。「命を大事に」を地で行くから」

普通そうだろ？　あぁ、何度不老不死になりたいと思ったことか。

だってそうすればどっかの戦争地域で戦争に巻き込まれても安心だし、なんかの事故に巻き込まれても安全だしね。
まぁ、未だに巻き込まれたこと無いけど。
いや巻き込まれたか、現在進行形で。

「お前面白いな。本当なら俺を助けて死んでる筈なのに死なねーし。決めたわ、お前転生させる決定」

「神様、それは横暴じゃないですか？　せっかく運命乗り越えたんだから無事に帰してくださいよ」

「横暴だっていいじゃない。神だもの」

「みつを。ってそうじゃなくて！！」

「いいじゃん、もう手遅れだし。世界からお前のありとあらゆる情報を消したから。お前の住んでた高級マンションも他の奴が住んでるぜ？誰の記憶にも残ってないし」

さ、最悪だこの神。
運命通り助けて死んでもアウト。
助けなくてもアウト。
どないせいっちゅうねん。
さらに言えば事後承諾とか、もう勘弁してくださいよ。

「まぁそう落ち込むなって。ほらアレ、なんだっけチート？　それあげるからさぁ」

しかも全く悪びれてねーですよこの神。
でもチートと聞いてちょっと反応してしまって悲しい。

だって夢の不老不死になれるかもしれないし。

「じゃ、じゃあ超速再生型の不老不死！！」

「あいよ。不老は１５～１７のどっかで適当に成長しなくなるから」

もうここまで来たら開き直るしかない。

転生？　上等ですよ、不老不死となった今。僕はここに「命を大事に」を捨て去ることを宣言します！！

「で？」

「はい？」

「それだけでいいのかよ。欲がねぇなお前」

「いやいや、十分でしょ」

「お前がいいならいいけどよ。行き先は型月の世界だぜ？　そんなチートだけで大丈夫か？」

か、型月だと！？

あの有名な直死の魔眼や、無限の剣製、王の財宝。果てには死徒二十七祖なんていうのがいる死亡フラグ満載の世界じゃないか。

直死の魔眼には僕の不老不死なんて何それおいしいのとばかりに切り刻まれるし、無限の剣製や王の財宝にはそれこそ不死殺しの武器があるはずだし……。

「全然大丈夫じゃないです。もっとチート下さい」

かっこ悪い？　は、その程度の屈辱で生きながらえる事が出来るなら土下座すら出来ますよ、僕は。
意地汚いのは人間の性ですよね。

「くく、いいだろう。魔法魔術に関しては宝石爺とか呼ばれてる奴と同等、言語知識もついでにくれてやる。さらに不死殺しの武器が利かない様にしてやる。これでどうだ？」

「神様最高です！！　トラックに轢かれる時に二回も見捨ててごめんなさいでした。それで、もう一つだけいいですか？」

「おう、言ってみろ。……あぁ、言い忘れてたが世界の修正力とかはお前に限っては働かないからな。世界そのものに掛け合って黙認させるようにしてあるから」

アフターサービスまで完璧、だと？
く、なぜ僕はこんな良い神様を助けなかったんだ。
ちょっと前まで真逆の判定をしていた気がしますけど気にしない。

「錬金術の知識を下さい。賢者の石を作りたいんですよね。あと精神をめちゃくちゃ強化してくれませんか？　元が一般ピーポーなんでこのままじゃ戦闘もまともに出来ないですし」

「いいだろう。くく、人殺しする気満々じゃねーか。経歴とかも色々こっちでやっとくからな。んじゃ行ってこいや」

「ゑ？」

その言葉と共に僕の意識は途絶えた。

最後に見た神の顔は実にイイ笑顔だったと思う……。

□

皆さんこんにちは。
転生して最初に見た顔はお爺さんの渋い顔でした。
なーんかどっかで見たことある人だなぁと思ったらこの人ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンその人ですよ。
つまりはアインツベルンの当主様。
それでまさかホムンクルスとして転生したのか？　と思いきや違った。
なんでもアホみたいな魔力を垂れ流した子供が城の付近で行き倒れていたので拾ってきたらしい。

魔力？　と一瞬不思議に思ったが良く考えれば魔法魔術に関してはあのゼルレッチさんと同等なのだったと思い出して納得した。
きっと魔力も同じようにゼルレッチさんと同じくらいにしてあるのだろう。

その後も色々と質問されたりして、取りあえず記憶喪失という事にしたら何時の間にかこの人の「血を受け継いだ孫」という立場になっていた。

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『僕は拾われたと思ったら何時の間にか実の孫になってた』。
な…何を言っているのかわからねーと思うが（ｒｙ

で、僕の名前はハルファス・フォン・アインツベルン。
お気づきになった方もいると思うがソロモン７２柱の３８である悪魔ハルファスの名前を付けやがった。
別にいいけどね、なんかカッコイイから。

さて、時期的にまだ第四次聖杯戦争は起こってない。
何故ならアイリや切嗣がいるのは兎も角として、イリヤも生まれている状況で、セイバーが居ないから。

セイバーが別の任についている可能性もある。が、あんまり原作は深くまで知っているわけじゃないけど、確かイリヤが生まれていて、さらに切嗣が普通に城に入れてるって頃はまだ聖杯戦争は起こっていないのだろう。

もしくは起こる寸前か、まぁ詳しくは分からない。
因みに孫という事は、必然的にイリヤの兄であり切嗣とアイリの息子という立場になる。

「宜しくねハルファス」

「……」

分かっていると思うが上がアイリ、下が切嗣ね。
で切嗣の視線がめっちゃ痛いです。
まぁ、いきなり見知らぬ子を養子。世間的には実子扱いしろとか言われても困りますよね。
ほら、イリヤが脅えてるじゃん。

「そういうことでハルファス。貴様は今日からアインツベルンの人間だ」

「分かりました」

確かアインツベルンは第三魔法を渇望してるんだったよな？
で、聖杯の力でそれを得ようとしてると。
となると僕はバックアップか何かの目的で利用されるのか？　うーん、よく判らん。

「家族の団欒中で悪いが失礼するぞ」

「なに！？」

「え？」

「……」

わぁ、ゼルレッチさん登場しちゃったよ。
あ、片手に宝石剣もってる。
それにしても何のようで……まぁ九割僕が原因ですよね。

「これはゼルレッチ殿。一体何用かな？」

流石に当主殿もゼルレッチさんは怖いよね。
イリヤはお父さんの後ろに隠れてる、可愛い。

「何、そこに居る第二魔法に至った小僧を引き受けに来ただけだ。気にするな」

うそやん。

プロローグ（後書き）

宝石爺の扱いが難しい

「白」（前書き）

キャラ崩壊注意報

「白」

僕とゼルレッチさんを除くアイリさん、切嗣、イリヤに当主殿は突然の来訪に戸惑い、そして拾って家族にした子供が第二魔法に至っているという可笑しな話にすっかり呆然としている。

「どうした？　何を呆けておる」

「そりゃいきなり来て、尚且つこんな子供が第二魔法に至っている。なんて話したら普通は反応できないと思いますよ？　ゼルレッチ殿」

「ふむ、しかし事実だからの。まぁよい、反論がないのならさっさと行くぞ」

「行くって……もしかして時計塔に行くんですか？」

時計塔とは簡単に言えば国籍・ジャンルを問わず魔術師たちによって作られた自衛・管理団体。魔術を管理し、隠匿し、その発展を使命とし、外敵（教会、自分たち以外の魔術団体、禁忌に触れる人間を罰する怪異）に対抗するための武力と、魔術の更なる発展のための研究機関を持ち、魔術犯罪の防止法律を敷く。
一般社会で魔術がらみの事件を起こしたものは処刑されるが、「正義」「道徳」ではなく、「神秘の漏洩」を防ぐことがその最大の目的。

という組織で、ゼルレッチさんも「青さん」も一応所属していたはずだ。

「そうなるな、どのみち反対はさせんが」

この人から神様と同じ臭いを感じた、だと！？

「分かりました。出来れば僕が魔法使いであることは魔術の世界では周知の事実にしたいのですが可能ですか？」

「ふむ、まぁ可能じゃろう」

有名になりたい訳じゃないけど、知られずに居るよりも、知っていて貰った時の方が色々と融通も利くだろうしメリットの方が絶対に大きい。
神様にそのまま貰ったものだから反則してるみたいで少しだけ後ろめたいが、今更だろう。
封印指定に関してはゼルレッチさんがされてない現状は安心だろうが、超速再生や不老不死についてはそのうち上手い言い訳を考えておかなければならない。

「では行くぞ」

その言葉と共に空間が裂け、一瞬にして時計塔、つまり魔術師の本拠地に辿り着いた。
知識としては分かっていたが、この爺さん本当に凄いな。
そしてそんな凄い人の能力を貰っているかと思うと嬉しいやら、情けないやら……。

「さてお主……そう言えば名前を聞いてなかったの。名前はなんという」

「ハルファス、ハルファス・フォン・アインツベルンですよ。それでゼルレッチ殿は僕の事をどこまで把握してくれているんですか？」

「ふむ、いい名じゃな。お主のことは異世界からの来訪者、第二魔法に至った存在、ワシと同等の魔法魔術的知識を持っている、吸血鬼ではないが不老不死、世界に黙認される存在。とまぁ、ほぼ大体理解しておるよ」

一体どうやってそこまで知ったんだろうか？　いや、そういえば神様が経歴とかこっちでやっとくとか言っていたな、もしかして神様とも繋がりあったり……やめよう、なんか恐ろしい結論に達しそうだから。

「それにしても宝石剣は既に作っておったのか」

「え？」

ゼルレッチさんの視線の先、自分自身の右腕を見ると何故か（形は多少違うが）宝石剣が握られていた。
まだ機能させていないため煌びやかな刀身ではないが、無骨ながらも美しく、刃というよりも鈍器として見た方が良さそううな剣。
何故？

「ふむ、流石に完璧に作成しておるのう。宝石剣ハルファスとでも名づけるか？　まぁ、なんにせよそろそろ行こうかの」

「あ、はい」

これも神様の仕業だろうか？　いや、ゼルレッチさんが知らないというのならそれ以外にはありえないか。なんにせよこれで戦う準備は出来た訳で、多重次元屈折現象を使って秘剣燕返しや敵を中心に回避不能な全方位攻撃も可能となった訳でもある。

神様、何から何までありがとうございます！！

その後は殆んどをゼルレッチさんに任せているとあっという間に面倒ごとは終わり、時計塔の上層部っぽい連中の前で宝石剣を使って並列世界の運用を見せて、未だに信用していなかった人達を納得させたりしていた。

爺共の腹の探りあいみたいな会話は興味がなく聞いていなかったので割愛。

暫くは時計塔周辺とかをフラフラしながら魔法の練習をしながら遊んで過ごした。

並列世界の運営に関しては知識は十二分にあるので、あとは練習だけなのだが、これが思いの外上手くいき、ゼルレッチさんの様に「個」を持ったまま他の並列世界にも行けた。

魔力による斬撃は並列世界から魔力を幾らでも持ってこれるので実質無制限に撃ち放題。

宝石剣に魔力を流せば煌びやかな刀身となり、世界に穴を開ける性質が真価を発揮する。

その構造上、宝石剣は魔力を内部で乱反射し続ける形となり、１の魔力が内部で反射し、角度ごとに違う並行世界が出来上がり１００の魔力になる。

つまりは宝石剣とは内部に並列世界を作っているのだ。

転移に関しても他の並列世界に行く原理のちょっとした応用で、Ａ→Ｂ→Ａという風に、今居る世界をＡとし、その向こうに並行世界をＢ、そして更にその向こうに行きたい場所Ａを重ねて穴を開け、知覚出来ないほど一瞬だけ並列世界を経由して移動する方法で、非常に利便性が高い。

多重次元屈折現象も並列世界から違う角度で攻撃した自分の斬撃をちょっとだけ此方の世界に顕現させて行う。
それこそ軽く振るった斬撃を、数万単位で他の並列世界から持ってきて重ねて同時に振るうことで極太のレーザー砲みたいな真似まで出来る。
最初見たときはどこのトランザムライザーかと思ってしまった。

「俺がガンダムだ」

閑話休題。

まぁ、何はともあれそれから数日後には史上最年少の魔法使いとして正式に認められ魔術協会から「白」の称号を頂いた。
ゼルレッチさんに「万華鏡」という名があるのだから厨二病よろしく虹とかでいいんじゃないの？　とか思ったけど、色々と理由があったとかなんとか。
別に嫌なわけではないので困らないが。

「色々とありがとうございました」

「なに、一応頼まれていたのでな」

聞かない、聞かないぞ。
誰から頼まれたんですか？　なんて薮蛇率１００％な事なんか絶対に聞かない。

「そ、そうですか。それでは僕は一度アインツベルンに戻ります。色々とやりたいこともあるので」

「ふむ、聖杯戦争に関わるつもりか？」

「……いえ、今回の聖杯戦争にはそれほど関わるつもりはないです。ただ折角家族になった人を見殺しにするほど心は死んでませんので」

アイリさんとイリヤ。
母と妹という関係になり、アイリさんは第四次で死亡。イリヤも存命ルートに入っても短命という条件が付いて回る。
まだ殆んど面識はない。
どちらかと言えばゼルレッチさんとの方が言葉を交わしてるかもしれないが、それでも「家族」だ。
出来れば助けてあげたい。

「ほう。そうかそうか」

ゼルレッチさんは笑いながら僕の頭をワシワシと乱暴に撫で回すと何処かに行ってしまった。
転移したのか、並列世界に行ったのか。
どちらにせよ借りが出来てしまったな……。

□

「本当に便利だな」

早速覚えたばかりの転移で直接アインツベルン城に帰ってきた。
相変わらず馬鹿デカイ城だと思う。
尤もその馬鹿デカイ城を拠点にこれから色々と動くのだが。

「……帰ったか」

そのまま城内に入り、人の気配がする部屋に入ると中にはアイリさん、切嗣、イリヤに当主。
とまぁ城を出る前の面子が椅子に座って待ち構えていた。

そういえばアインツベルンは侵入者はすぐ探知できるんだったな、と既に薄れてきている原作知識からなんとか思い出してここで待ち構えていたのに納得した。

「はい、事の顛末は大体魔術協会から来ている筈ですので知っていると思いますが」

「知っておるよ。アインツベルンの秘蔵っ子が史上最年少で魔法に至った。勿論「白」を貰ったこともな。お陰様でアインツベルンの名家として名声は更に上がり始めておる。……さてハルファスよ、貴様は記憶喪失と言っていたがアレは嘘だな？」

場の空気が底冷えするように張り詰め、決して嘘は許さんといった状況を言外にあらわにしている。
流石は何百年も生きているアインツベルン当主。と言った所だろうか？　神様に精神強化ＥＸ？をしてもらってなかったらとっくに小便を漏らしている自信がある。

「いえ、嘘ではないです。魔法魔術に関しての知識はありますが肉親や自分に関する事柄などは覚えていないので」

「……つまり裏が在る訳でもなく、全て偶然であると。そういうのか？」

「そうです。できればこのままアインツベルン家の一員として扱って貰えると嬉しいんですが」

「ハルファス、魔法使いたるお前が私の孫か。くく、これはとんでもない拾い物をしたものだ。ははは」

なんかしらんけど認めてもらえたっぽい。
そして上機嫌？　で笑いながら部屋を出て行くお爺ちゃん。
傍から見たら変人にしか見えないのだが……まぁいいか、アイリさんがありえないものを見た様な目でその後姿を見つめていたが、きっと大丈夫。
だってアハト爺だもん。

「という訳で今日から宜しく、母さん。そして妹よ」

「え、えぇ改めて宜しくね？　ハルファス」

「お、お兄様？」

無難な返事を返す母さんと、切嗣の服の裾を掴みながら頭だけひょこっっとだして聞き返すイリヤ。
やばい、イリヤが可愛すぎてやばい。

「おいで」

「う、うん」

躊躇いながらもおずおずと近づいてくるイリヤはもはや小動物のそれにしか見えない。
後ろで切嗣が鋭い視線を浴びせてくるがそんな物等このイリヤの前には全て無効化されるのだ！！

「あぅ」

……頭を撫でるだけのつもりだったのに気付いたら抱きしめていた。
何が起こったのか……は分かってます、はい。
だがしかし、あえて言おう。
イリヤ可愛いいいいいい！！

そのまま頭を優しく撫でると顔を赤くしながらも目を細め、暫く経つと顔が完全に蕩けていた。
可笑しい、さすがにナデポのチートは僕には無かったはずだが……
まぁ、いいか。
何時までもこのままで居るわけにもいかないので、手を放すと今度は僕の服の裾をちょこんと摘むマイ・シスター。

な　ん　だ　こ　の　可　愛　い　生　き　物

「……母さん、無言で背後に立つのは怖いんですけど」

そう、母さんは僕がイリヤを愛でてる最中に何時の間にか移動し、僕の背後に立っていたのだ。
だが何も答えずそのままイリヤと一緒に抱きしめられる。

「イリヤと仲良くしてあげてね。お兄ちゃん？」

その言葉と抱擁はとても暖かく、そして気付いた。
本当に家族として迎え入れてくれたのだと。
まだ出遭って間もない。
出身は不明。
魔法が使える。
普通に考えれば怪しさ満天の化物。
それでもこの人は僕を家族として迎え入れてくれたという事実が嬉しくて、誤魔化す様に抱きついて涙は見せないようにした。

そして同時に決めた。
もう一度、心に烙印を押すかのように刻み込んだ。
絶対にこの二人を助けて見せると。

切嗣？　終始空気でしたが何か？

□

あれから四年経ちました。
展開が速い？　いやいや特に記述する事はあまりないんですよね。
ゼル爺と何度か手合わせという名の死闘を繰り広げたり、「青」のあの人に襲われて後一歩というところまで貞操の危機が迫ったりはしたけど。

僕が魔法使いだという事はこの四年でほぼ完全に認知されました。
目的としてはアインツベルン家に対する恩返しというか、「魔法使いを輩出した家」という名誉をアインツベルンに与えるためというのが表向き。
後は反感を買うためでもあったりする。
至上最年少、脅威の五歳児が魔法に至った。等と言う事実が知れれば少なからず反感を買う筈だと言う目論見があったからだ。
結果としてそれは大成功であったと言える。

予想通りに最初の三年間の間に結構な数の暗殺者や魔術師という様々な職種の方々が襲ってくるので、全員揃いも揃って僕の貴重な「経験値」になって貰った。
といっても即座に殺すわけではなく、賢者の石の材料として使う。

この賢者の石を作るために魔術カバラ、基督教カバラ、エジプト神学、ギリシャ・ローマ神学、ルーン、ソーサリー……ｅｔｃ
様々な知識をかき集め、数万の魂を凝縮した真紅の宝石を完成させることが出来た。

某錬金術師では内部に凝縮した魂の意思が混在していたが、それは聖杯のシステムを真似て内部に英霊ではない魂を限界ギリギリまで「特別に作った器」に溜め込み、開放した際に生じる莫大なエネルギーを魔術で固定し、その場でエネルギーを「個」へと練成する。

そうして出来上がったのは数万の魂から生じたエネルギーの結晶。前述の通り真紅の宝石でもあり、法則を無視して練成することが出来る魔術礼装であり、一個の魂でもあった。

だが魂といってもそこに何者の意思は混在していない。何故ならそれはあくまで魂を開放した再に生じたエネルギーを集めたものだからだ。故に無垢。皮肉にも僕の称号である「白」が如く、何にも染まっていない存在。

そして賢者の石を魂の器とし、アインツベルンのホムンクルス技術。更には天才人形師である蒼崎橙子さんにゼル爺の伝で相互協力を求め、完成したのが本物の人間と大差ない、されどホムンクルスでも人形でもなく、人間に限りなく近い人間ではない存在が出来上がった。

外見上はイリヤと母さんを参照に本人そっくりにしてあるので、あとは本人達の魂をいかに賢者の石という名の魂に上書きするかが課題であったが、それも神智学、インヤム、降霊術を参考にしながら全世界の錬金術の知識を組み合わせ、本人の魂だけを「情報」として見立てて賢者の石に再練成することによってクリア。

元の聖杯用の肉体は仮死状態のままアインツベルンで保管し、今では母さんもイリヤも新しい体で普通に生活している。

そして流石は賢者の石製といったところか。
以前よりも大きな魔力に半永久的な不死性と不老性が付加されていた。
尤も、不老性といっても完全な不老ではなく、肉体の全盛期位で成長が止まるといったレベルだ。

因みにそれだけの魂をどこで調達したかというと、実は元手となる魂事態は五人分程で事足りる。
どういうことかと言うと、宝石剣が魔力を流すことで内部で並列世界を形成するのと同じように、魂を入れて内部でその魂の並列世界を形成する「特別に作った器」を作成したのだ。
普段は手のひらサイズの水晶だが内部は複雑に、そして緻密に魂の逃げ場が無い万華鏡の様になっている。
後は魂を開放してその際に生じるエネルギーだけを使うといった形だ。

当初はありもしない魂をそんなに増やしてこの世界で開放してもいいのか？　と悩んでいたがゼル爺と話し合った結果、物質界より上の星幽界という概念に行くだけだし、この世界での魂は記録としての情報を留める機能が殆んどだから大丈夫じゃね？　という結論に達した。

ま、結論として。
イリヤスフィール・フォン・アインツベルン
アイリスフィール・フォン・アインツベルン
の両名を当初の目的通り聖杯という呪いからは助け出すことが出来たと思う。

その際には何時の間にか息子として仲良しになっていた切嗣にマジ泣きで感謝され、お爺ちゃんからは「これなら聖杯が無くても第三

魔法に到達できるやもしれん」等と褒められた？
果たして一人の人間が二つの魔法に至れるのか甚だ疑問なのだが、実際どうなんだろうか？　ゼル爺辺りはできそうだけども。
母さんも喜んではいたが切嗣と一緒に第四次聖杯戦争に参加することは変えるつもりはないとのことだ。
元々そのために切嗣が来たわけだし、その切嗣を縛り付けるためのイリヤという存在との事。
最早原作知識など殆んど消えているので断片的にしか覚えていないが、最終的に第四次は切嗣は生き残っていたはずなのでそこまで心配はしていない。
母さんは言わずもがな。賢者の石補正サイキョー。

そしてマイ・シスターことイリヤは完全に　ブ　ラ　コ　ン　になりました。
……やっちゃったＺＥ！。

いや、一緒にお風呂に入ったり、一緒にお勉強教えてあげたり、一緒にご飯食べたり、一緒に……（ｒｙ
つまり時計塔の依頼や賢者の石作成時以外はほぼ常に一緒に居て、撫でたり愛でたりを延々と繰り返した結果がこの様と言う訳です。

「お兄ちゃん～、えへへ」

「あらあら、本当に仲が良いわね二人は」

「そりゃ勿論。だって僕達は兄妹だからね」

「ねー。　はいお兄ちゃん、あ～ん」

「あ～ん」

「美味しい？　今日はイリヤもお母さんと一緒にクッキー作ったのよ」

「馬鹿だなぁ、イリヤが作ったもので不味いものなんかあるわけが無いじゃないか。とっても美味しいよ」

「本当！？　また作るねお兄ちゃん！！」

今現在も僕の膝の上で対面向き合って座っているイリヤの頭を撫でている最中で、最早癖となっていて僕自身も無意識のうちにやってしまうのだよ。

食べさせあいっこなんざお手の物。

イリヤ……恐ろしい子！！

あ、イリヤのお兄様という呼び方は僕が辞めさせてお兄ちゃんに変更させました。

理由？　その方が個人的にキュンキュンくるからだよぉ！！

ＹＥＳロリータＮＯタッチ！！！

「……き、切嗣！　あ、あ～ん！！」

「えぇ！？　僕達もやるのかい！？」

「い、嫌なの？」

「うっ、あ、あ～ん」

「ど、どうかしら」

「……美味しいよ。アイリの愛情を感じる」

「もう！！　切嗣ったら」

「いいかいイリヤ。ああいうのを世間ではバカップルというんだよ」

「うん、お兄ちゃん。ママ達はバカップルなのね」

「「ハルファス！！　イリヤに変な事を教えないで（くれ）」」

これは第四次聖杯戦争前のちょっと変わった家族の暖かな風景。

「白」（後書き）

なにかが間違ってる気がする

召喚（前書き）

長らく待たせてすみません！！
年末年始は急がしい……すみません言い訳です。

召喚

気がついたら周囲をぐるりと囲まれていた。

下卑た目で見てくる者、殺気を放ってくる者、脅えを必死に押し隠している者、その全員が僕を起点に３６０。、１５人位で各自の魔術礼装だったりを構えている。

堕ちた者。

それが彼らの、今回時計塔より僕が処理を依頼された魔術師達の世間的に付けられてた汚名であった。

まぁ、神秘の漏洩や一般人の誘拐等をしていれば当然の結果なのだろうけど。

「汚いなんて思うなよ化物、我らはこんなところで止まるわけにはいかんのだからな」

「くく、安心しろよ。『魔法』にまで至った貴重なサンプルだ、丁重に念入りに解剖して研究に費やしてやるよ」

汚い――――とは思わない。

この世界に来て早４年になるが、その間にありとあらゆる襲撃、暗殺、攻撃に出逢ってきた。

今更になって罠を張られて数十人に囲まれる――――なんて『どうってことない』

そもそも僕自身はそこら辺にいる一般人の少年の身体能力とさして変わらないのだから。

あくまで一般人の肉体に『再生』『不老』『不死』『魔法』『魔術』、それらがあるだけの存在なのだから、当然待ち伏せをされてもどっかの達人達と違って気配察知なんか出来やしない。
それにこれは殺し合いだからね。
お互いに賭けるのはその命。

「――――なら貴方達の魂だけは僕が奪って使ってあげますね」

ニコリと笑い、その言葉と共にぶらりと下げていた右腕を正面の４人向けて横一文字に振るう。

一瞬の動作、俗に言うワンアクションで僕の魔術礼装『宝石剣』に魔力を通し、第二魔法の一部を使った攻撃を行う。

「な！？」

声は正面からではなく、背後から。
僕の攻撃を放った前方は幾重にも重なり合った一文字の魔力刃によって扇状に消し飛んでいる。
当然そこにいた４人は避ける時間すら無く、一瞬にして塵芥となり、左手に持つ水晶に魂らしき何かを吸わた。

「貴様！？　くっ、お前達やるぞ！！」

恐らく師と思われる魔術師と思われる老人の一声によって周りの魔術師達が火や氷等と言った様々な魔術を放つ。
そしてそれと同時に老人が杖型の魔術礼装を地面に突き立て、術式を展開し、僕が立っている地面が妖しく光り輝く。

恐らくは設置型の魔術。

だがそれが分かったところで如何せん範囲が広すぎる。
故に、魔術の一つである錬金術の恩恵で手に入れた『思考分割』『高速思考』によって何のタイムラグも無く逃げる、避けるといった選択肢を排除して周囲の魔術師を魔力刃で殺していく。

そして既に死んだ魔術師達の放った魔術が僕の足、胸といった場所を貫き、燃やし、次いで目が眩むほど程に妖しく輝いていた地面が大爆発を起こした。

「や、やったか！？」

大爆発の煙で周囲は見えないがこれだけは言いたい。

（それは死亡フラグ、またはやってないフラグだという事を）

結局の所、あれほどの爆発を受けても痛みも、恐怖もなく、ただ着ていた服が欠片も残さず消し飛んだ位だった。
魔術の攻撃よりも僕自身の超速再生による肉体修復の方が早いという単純な種明かし。

さて、この超速再生だが、流石神様お手製と言ったところか。
肉体の損傷だけではなく、例えば死徒や真祖の吸血鬼に血を吸われ、その血を送り込まれても、それを『異物』と判断して即座に排除する。

とまぁ、中々に化物な能力なのだが痛いものは痛い。
頭を消し飛ばされても、各部位を１０ｃｍ単位でバラバラにされても、チリ一つ残さず消し飛ばされても修復されるが、同時に尋常じゃないほどに激痛が走る。

恐らく精神ＥＸが無かったら廃人√まっしぐらだったね。
で、その痛みを緩和しようと色々試行錯誤して、結局痛覚の９０％カットになったという結果になりましたとさ。

そんな事を考えながら取りあえず全裸は嫌なので、煙で見えない内に両手をパンッと合わせ、某金髪チビ錬金術師の真似で賢者の石を用いて服を練成しなおす。

バチバチッと練成による現象が終わると同時に再び宝石剣を構え、適当に敵が居そうな場所に向かって振るう。

「ぐっ、ぎゃあぁぁあ゛あぁぁぁぁぁぁぁぁああぁあぁぁぁあア！？」

む、恐らく適当に放った魔力刃のどれかが誰かに当たったのだろう。

みっともなく醜い悲鳴が聞こえた方向に更に追い討ちを掛ける様に数千、数万の魔力刃を放つ放つ放つ。

突然の攻撃に処理が追いついていないのか、僕に対して攻撃をするのすら忘れ、必死に逃げ惑う彼らの声や足音が聞こえ、更には腕、足、ないしはどこかの部位が魔力刃によって切断されたのか、誰かの絶叫も響いている。

「さて、最初の７人と今の攻撃で吸収したのが５人……かな？　となると後は３人か」

暫くして視界が晴れる。
そこにいたのは両腕と片足を失い、それでも生き汚くなんとか這って逃げようとする老人、両足が膝辺りで綺麗に切断されて脂汗を掻

いている弟子の男、そして驚く事に掠り傷程度で失った部位は見受けられない女の弟子の3人が居た。

「ひ、ひっ、あひぃひ」

「だ、だから嫌だったんだ！！　こんな化物を相手にするなんて！！」

「はぁ、はぁ」

うん、見た目通り満身創痍だね。
僕は特にS っ気がある訳じゃないから早く逝かせて上げよう。
それがきっと今の僕が持ってる一番優しい選択肢だから。

まずは老人に向けて宝石剣を縦に振るう。

「――――！？」

最後に何かを言おうとしたようだがその前に密集した魔力刃に切られ、押しつぶされ、消えた。

「た、助けてくれ」

男の弟子の方が必死の形相で懇願してくる。

「助けないよ。僕個人としては君達を殺したい、という感情は特に無いんだけどね？　時計塔に依頼されて受けちゃった以上は殺さないという選択肢もまた無いんだよ」

僕は笑う。

きっと目の前の男女には悪魔の笑みにしか見えていないだろう。
恐怖し、絶望した表情からそんな予測を無駄にしてみる。
「怨むのなら僕か時計塔か、堕ちた事を時計塔に気付かれた自分達にしてね。関係無い他人は怨んじゃ駄目だぜ？　まぁ、来世があれば是非同じ間違いは起こさないよう頑張ってね」
そんな言葉も聞こえていないのか残った両腕で必死に後ずさりをしている男にも師と同じように魔力刃で逝かせる。
これは希望的観測だが恐らく恐怖はあっても痛みは感じることすら無かっただろう。
「さて、残りは君だけなんだけど……どうして逃げなかったのかな？　もしかして遺言とか残すタイプ？」
「違うわ、逃げても無駄だと思うから交渉しようと思ったのよ」
「交渉ねぇ、まぁいいや言うだけ言ってみてよ」
「私を買って頂戴。勿論貴方の言う事には逆らわないし、犯したい、抱きたいというのなら何時でもこの身を差し出す。私たちが研究していた魔術や所持している魔術礼装も差し出すわ」
目の前の美女が男を魅了するように胸を両腕で押し上げ誘惑してくる。
普通の男ならその腰の括れや大きな胸に目が行き、その内容を飲んでしまうのかもしれない。
普通なら、だけど。

「そんなのいらないよ」

さっきの二人と同じように僕にとってはなんの魅力もない交渉を切り捨てる。

「な、待ちなさい！　さっき貴方の攻撃を避けきった方法を知りたくないの？　それを知れば貴方は更に強くなれるわ」

「興味ないよ。それじゃぁ――――――ばいばい」

さっきの出鱈目に攻撃したのを回避されたのを考慮して、今度は逃げられないように全方位からの魔力刃を放ち、更にもう一度縦に振るう。

ズン、と音が辺り一面に響き、先程まで生きていた女の存在は全てこの世界から消していた。

その後は一応の後処理として錬金術で抉れた大地や木々を元に戻し、あたりに散らばっていた死体や肉片も処理した。

「まったく、最初に殺さないという選択肢は無いって言ったのに。というか結局全方位からの攻撃は避けれないのか」

先程の女に対して愚痴を零し、ひと段落した所で不意に空を見上げれば来たときは真っ暗だった空が明け始めていた。

「あぁ、もう夜明けじゃないか。早く帰って寝よ寝よ」

□

朝、眩しい程の日の光が窓から差し込む中で目が覚める。

「ん？　イリヤか」

ふと横を見れば腕に抱きついて眠る可愛い妹様がそこにはいた。
昨日は色々とお土産を買ってから魔術師の殲滅に出たのが行けなかったのか結局今日の明け方まで掛かってしまった。
そのせいか帰った頃にはイリヤが僕のベッドで既に眠っていた。

「ん……ん～……」

イリヤも起きたのか目を微かに開けた半眼のまま両腕を上げぐっと伸びをする。
相変わらず美しい銀髪が射し込む日の光で輝いている。

「おはようイリヤ」

「ん、おはよ～お兄ちゃん」

そういって僕の膝の上に座るイリヤの髪を優しく櫛でとかす。
最近ではほぼ毎日やっている作業だ。
イリヤ曰くこれがないと一日が始まらないの！　なんて言っていたのを聞いて苦笑した覚えがある。

「お兄ちゃん……昨日夜の9時まで待ってたのに帰ってきてくれなかった」

「あぁ、ごめんね？　ちゃんとお土産買ってきたから許してよ」

「駄目！　毎回毎回それだもん！　もうお土産じゃイリヤは誤魔化されないんだから！」

私怒ってるんだから！！

とでも言うように両腕を組んで頬を膨らませるのは小動物っぽく思う僕は悪くない。

しかもその間も櫛でとかして貰っていて全てを台無しにしている所がポイントだ。

「えいっ」

「ぷひゅ！？」

少しだけ髪を溶かすのを中止してその頬を両手で突くと、間抜けな音を出しながらアヒル口になった。

「もう～お兄ちゃん！！」

「あはは、ごめんごめん。それじゃ今回のお土産は僕が食べちゃうね」

「え！？」

「あーあ、折角イリヤが好きなクッキーやケーキを買ってきたのに

なぁ～イリヤは要らないんだよね？」
チラチラッと横目に見ながら態とらしく喋る。
「う、う～」
「どうしたのかなぁ」
「こ、今回！　今回だけだからね！　次はお菓子じゃ許してあげないもん！」
イリヤが折れた瞬間であった。
因みに言えばこれは４年間何回も行っている。
毎回お菓子のお土産に釣られるイリヤが可愛く、一時期は態と遅く帰ったりしたことがある。
だが意地悪をしずぎると本当に怒って一週間口を聞かないという結果になる事もある。
なのでその境界を見極めることが大切なのだ！
と、以前に母さん達に熱弁した所、生暖かい目で見られたのが記憶に新しい。
「イリヤは可愛いなぁ～」
「えへ、お兄ちゃんも可愛いよ」
――――イリヤに悪気は無い……のだろう。
これは僕自身の問題だし、実際にその表現は間違いではないのだから。

溜息を吐くのをなんとか堪えて近くにあった手鏡で自分の顔を映す。
其処にはイリヤにそっくりな銀髪を肩辺りまでストレートに伸ばした中性的な顔の……自分で言うのもアレだが美少年がいる。

イリヤをそのまま少し男らしくした感じと言えば分かって貰えるだろうか。
だが目は紅ではなく、碧眼。
肌はイリヤよりも真っ白で、もはや病的に白い程だ。
そして頭部の中央辺りから二つの触角という名のアホ毛が生えている。
別にアンテナ機能があるわけでもなく、ふよふよしてるだけです。

目の色に関しては何ともいえないが肌が異常に白いのは『超速再生』が関与しているのでは……とか思っている。
紫外線によって傷ついた肌を再生――――とか、真祖たちの血を排除できる超速再生さんなら余裕っすよね。
笑えねー。

まぁ、つまりは二次小説のオリ主よろしく『銀髪碧眼イケメン最強オリ主イエーイ』って事です。
本当にありがとうございました。

「ありがとう、イリヤ……」

「？　うん、えへへ」

あぁ、今はその純真な笑顔が眩しいぜ。

「はい終わり。それじゃ僕はちょっとお爺ちゃんに呼ばれてるから

行って来るね」

「え～、あ～そ～ぼ～よ～」

「後でね。これは家族皆が幸せになるために大事な事なんだ。だから――――これから少しだけイリヤには寂しい思いをさせちゃうけど、僕を……ううん、切嗣と母さんと僕を信じて欲しい」

「……」

「駄目、かな」

「駄目」

え、と思わぬ返事に僕は驚いてしまった。

「――――だから、お土産買ってきてくれたら許してあげる」

その言葉に一瞬ポカンとしながらも、直ぐにその悪戯っ子のような目をしたイリヤを抱きしめる。

「了解しました、お姫様」

さぁ、もうすぐだ。

□

冬に閉ざされた城、アインツベルンの本拠地。
その礼拝堂で切嗣と母さんは当主であるユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン八代目にして『アハト』の通り名で知られる老魔術師。
年老いながらもその眼差しは衰えず鋭さがある。
祭壇の上、そこには聖杯戦争に勝ち抜くための鍵、聖遺物が納められていた。それこそが剣の英霊、セイバーを喚びだす品。
そしてアハト翁は告げる。

「この品こそ最強のサーヴァントを招来するもの、切嗣よ。これを以て我が悲願を果たせ」

「御意」

アインツベルンの悲願、第三魔法《天の杯》の成就。魂の物質化という奇跡を彼らは求めていた、無論切嗣にはアインツベルンの悲願を果たす気などない。切嗣にとってそんなものは二の次、叶えるべき願いがある。

そう、切嗣は世界を救う。それでも今はアインツベルンに従い目的を果たす、そんな切嗣の顔を母さんはそっと横目で見て微笑んだ。
母さんの内心はもうアインツベルンとして第三魔法を求める気持ちは無く、聖杯になる必要性もない為に、ただただ切嗣に対する初々しい恋心と、共に聖杯戦争を勝ち抜き、切嗣の願いを叶える事を考えているだろう。

その頬を微かに染めている表情はとても一児の母には見えなかった。
母さんの生い立ちを鑑みれば無理もないことかもしれない、ホムンクルスとして産まれ聖杯の器たるべく育てられ外の世界を知らずに育つ。

『例え、愛する人に殺される運命だとしても』

それが母さんが聖杯の運命に囚われていた時に僕に一片の曇りもない顔で言っていた言葉だった。

切嗣に出会い母さんは漸く人形から人間へとなり愛を知った。
そして遂には器として死ぬ運命からも逃れた。
だからこそ母さんが浮かれるのは仕方ないのかもしれない。
愛する人に殺される必要もなく、家族とずっと一緒にいられるのだから。

（あの笑顔が見れただけで本当に苦労した甲斐があるしね）

そしてそのまま礼拝堂から退出し自室にて切嗣と母さん、そして僕はその品を確かめた。
剣の鞘。
黄金に輝き青の装飾が施されたもの、年を経て尚輝きを失わせない様は人ならざる者の手による工芸品を思わせる。

「……本当にこれを見つけてくるとはね、全くたいしたものだよ」

アインツベルンの本気を見た切嗣は呆れたように言う、そこまでして彼らは奇跡を求めたいのか。
いっそその本気を別の方向に向けたら貴族として発展したのかもしれないのに、落ちぶれる事無く。

とはいえ、今は魔術の世界ではかなり有名な一族になっているのだけど。
母さんは苦笑しながら、その鞘を見つめた。
「今回ばかりは大お爺様も本気よ、まあ正直第三魔法とか私はもう興味ないのだけれど」
「アイリ……」
「さすが母さん。バッサリだね」
あはは、と朗らかに笑う母さん。
人は変わると言うが母さんの場合は変わりすぎだ。
尤も、母さんの場合は実年齢は驚愕の『9歳』だから、柵から抜け出して周囲に影響された場合を考えれば納得できる。
そう、此処であえて言うが僕はアインツベルンに拾われた時点で『5歳』という設定だった。
そこから今日まで約4年。
何が言いたいか分かりますよね？　そう、僕も今年で『9歳』。
つまり、僕と母さんは同い年なんだぜ！？
で、イリヤが『8歳』。
……まぁ、何が言いたいかというと切嗣は1歳の母さんに――――
ゲフンゲフン。
最強のロリコンだよね切嗣は。
閑話休題

さて、この鞘は間違いなくセイバーを喚ぶに相応しい、というか呼ぶ。
アーサー・ペンドラゴン、騎士王として有名な英雄であり最強のクラスのサーヴァントにして腹ペコ大王。
ただし切嗣が不安に思っている通り相性は最悪、騎士王はその戦い方に賛同してくれないだろう多分。
だがここで立ち止まることが出来ないのもまた事実。
故に切嗣は召喚する。

そして全てが始まった。

アインツベルンの礼拝堂、切嗣は床に魔法陣を描き確認する。
英霊召喚、失敗は許されない。
僕達が見守る中、切嗣は集中する。
祭壇に鞘を置き、魔術刻印を行使。
準備は完了し、詠唱を開始する。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

何気にあの場面が目の前で見れるかと思うと微かに緊張する。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオ

ーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ――
誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

マナが切嗣の身体を蹂躙する、痛覚を無視して神秘を為そうとする。その痛みは勝利へと導くものだから。

「汝三天の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

風が吹き荒れこの世成らざるものが具現を果たそうとする、かくて切嗣の詠唱により熾天の玉座から英霊は舞い降りた。声は問う。

「問おう、貴方が私のマスターか」

召喚（後書き）

「お兄ちゃんの触角おもしろーい」
「え、そうかな」
「……まるで猫じゃらしだね」
「あはは、ねこじゃらしー」
「切嗣、結構上手いこと言ったつもりかもしれないけど上手くないからね」
「そうよ、どっちかっていうと白いゴ〇ブリよね」
「「母さん（アイリ）……」」
「あははゴ〇ブリー」
「（，・ω・、）」

目的（前書き）

ここら辺から本格的に原作崩壊、キャラ崩壊注意報発令

目的

冬になり雪が降り積もる中、アインツベルン城には新しい家具が到来していた。

炬燵。

日本人ならば知らぬ人など居ないほどにポピュラーな暖房器具である。

曰く、炬燵は悪魔が人類を堕落させるために作ったものだと言う話が良くあるが、目の前の惨状を見ればあながち間違いでもないのかもしれない。

「うにゅー」

つい先日、頑固爺であるアハト爺を必死に説得し、孫からのプレゼントと称して強引に炬燵を渡して使って貰い、その魅力に魅入られたのを確認して最新鋭の炬燵をアインツベルンに配備したのである。

そしてその最新鋭の炬燵に入りテーブルに突っ伏してだらけているイリヤはもう本当に可愛い。本当に可愛い。

大事なことだから二度言った。

イリヤはそのまま純粋に育ってね。

「まだ食べちゃ駄目なのハル？　もういいでしょ、いいわよね」

「駄目だよ母さん、もうちょっと待って」

「えー」

炬燵の上で鍋。
これも定番であり、現在カレー鍋を煮ている最中なのだ。
だがそれを我慢できないのが僕たちの母であり、ちょっと幼児退行し始めた感があるアイリ。
この人は色々と柵がなくなったのかかなりはっちゃける様になってしまった。
どこで間違えてしまったのか……。

「蜜柑食べなよ蜜柑。おしいよ」

勿論大型の蜜柑ではなく、小型の手の平サイズ、しかも態々現地に行って厳選した完熟蜜柑。
それも目の前にいる腹ペコ大王の為にダンボール数十箱に詰めて購入し、今も部屋の隅で山になって積まれている。

「駄目よ、蜜柑はデザートでしょ？　あ、もしかしてハルは好きなのから食べるタイプ？」

「意味が分からないよ。って何でもう熱燗飲んでるのさ！　没収！」

「あー私のー」

あぁもう、折角温めておいたのに。
何時の間にか二瓶も飲んでるよこの人。

「通りで言動が可笑しいと思ったよ、まったく。因みに好きなものから食べるタイプだけど何か」

「えへへーイリヤもね、好きな物から食べるんだよーお揃いだねー

お兄ちゃん」

「私？　私はねー切嗣に食べられちゃったのーあはは」

聞いてねーよ、というか何このカオス。

しかも切嗣に食べられたとか俗な事をイリヤの前で言うんじゃないよ。

「この蜜柑というものは本当に美味しいですね。手が止まりませんハルファス」

「それは重畳。セイバー用に多めに買ってきたから好きなだけどうぞ」

「はい。ところでそろそろそちらも宜しいのでは？」

カレーの鍋に視点を完全固定しながらも手だけは蜜柑の皮を剥く為に動かし、パクパクと食べている姿には王の威風等はなく、ただの食い意地張った腹ペコ少女だった。

騎士王アーサー・ペンドラゴン。

「アーサー王伝説」や「アーサー王と円卓の騎士等で」世界的に有名なあの伝説の王。

その実、アルトリアという一人の少女にして、選定の剣に選ばれた王。

性別を偽り、心を殺し、理想の王たらんとした王。

その少女が切嗣によって召喚されたとき、声が出なかった。

彼女が召喚されることは分かっていた。

だというのに、一目見た瞬間にその真直ぐな瞳に思わず飲み込まれ

てしまったのだ。

王として、『自国の救済』を叶えんが為に聖杯を求める。
そのどこまでも一途で真直ぐで、確固足らんとした『目的』。

――――僕は彼女をどうしたいのだろうか？

救いたいのか、ただ自分と違う存在が眩しいだけなのか、羨ましいのか。
未だその結論は出ない。
ただ分かっているとすれば――――僕は彼女を嫌っていないということだ。

「？　私の顔になにかついていますか？」

おっと、考えに没頭して見つめ過ぎたみたいだ。

「ううん、なんでもないよ。っとそろそろ鍋も良い具合だし食べようか」

「これで私も鍋将軍ね」

「鍋しょーぐん？」

……また変な事言い始めたよ。
偏った知識ばっかり持ちすぎだろ。

「鍋将軍って言うのはねー、料理が出来上がるまで我慢して手を出さなかった人が手に入れる称号なのよー」

違うから。
全然違うから。
むしろ本来の意味の正反対に位置してるから。
というか正式名称は鍋奉行だからね。

「じゃぁイリヤも鍋しょーぐん！！」

「ふむ、ならば私は鍋王ですね」

イリヤは本当に純粋だなぁ。
それに比べてドヤ顔のセイバーはもうどうしようもない。
絶対アーサー王って言われても誰も信用しないよ。

「大体、母さんとイリヤにセイバーが鍋将軍なら僕はなんなんだよ」

「んー？　ハルは一般兵よ。将軍の為に鍋をせっせと作る兵隊さん。よきにはからえー」

「よきにはからえー」

「……（よし、よーしよし。落ち着け落ち着くんだ。酔っ払いの戯言だ戯言）」

凄く、殴りたいです。
僕が芸人ならばここで炬燵事テーブル返しの奥義をお見舞いしてやるところなのに。
そして背後で一人寂しくパソコンをカタカタ打ってた切嗣の生暖かい視線が非常に不愉快。

「……ハルファス」

「……なに？」

「私は、鍋将軍ではなく鍋王です」

ぶちっ

「知るかバーカ！　何が鍋王だ阿呆が！　大体鍋将軍じゃなく鍋奉行だ！　しかもそれは鍋料理の際にただ仕切る人の事を指すんだよバーカバーカ！　ひたすら蜜柑食って視線は鍋をロックオンしてただけの人が何か仕切ってましたか？　何か貢献しましたか？　それで鍋王？　はっ！　腹ペコ大王の間違いだろバァァアカ！！」

「……表に出なさいハルファス。今の言葉はアーサー王たる私への侮辱と受け取りました」

「アーサー王？　ぷぷっ、あれれ鍋王じゃないんすかー？」

思わずブチ切れてしまったがこれは仕方ないと思う。

反省も後悔もしていない。

例えセイバーが据わった目で此方を睨んできていようとね！！

精神ＥＸの僕にその程度で恐怖心を与えられると思うなよ。

……でも念のために片手に宝石剣装備しとこ。

もっとも、セイバーなら僕が気付く前にエクスカリバーで僕の首を切れるだろうけど。

「お肉美味しいー」

「本当ね、早く聖杯戦争始まらないかしら？　そうすれば日本で食

べ歩きが出来るのに」
背後で切嗣が微かにオロオロとしてる様な気配を感じながらゆっくりと立ち上がる。
「お兄ちゃんもセイバーも食べないならイリヤが食べちゃうよ？」
「コクコク。――――ふひぃ、炬燵にお鍋に極めつけは熱燗！　最高ね！」
チラリと母さんを見ると鍋をよそっては食べ、熱燗を新たに1瓶飲み明かして完全に性格とか諸々が崩壊している状況だった。
しかも衣服は着崩れ、頬が酔いで紅潮している所為か妙にアダルティーです、はい。
そして再び交わる僕とセイバーの視線。
お互いに思っていることはきっと同じ筈。
「……やめよっか。僕が悪かった、ごめん」
「……そうですね。私は……何が悪かったのか今一理解できていませんがすみませんでした」
さっきの妙な怒りはなんだったのか、すっかり毒気を抜かれた僕たちは二人揃って苦笑いしながら鍋をつつくのだった。
因みに僕は熱燗は飲んでないよ？　お子様らしくイリヤと仲良く牛乳です。

□

「寝ちゃったか」

御腹一杯になって疲れていたのかグッスリと眠っているイリヤの髪を梳きながら独り言の様に呟く。
母さんはほろ酔いのアダルティーモード。
セイバーは再び蜜柑剥き作業を再開、でも視線は切嗣の為に残してある鍋を凝視。

うーん、良かれと思ってやったんだけどこの時代で腹ペコ大王に覚醒させたのは不味かったか？
ぶっちゃけ原作通り切嗣との仲は良くないのに、セイバー自身はさっきから切嗣をガン無視。
こんな早く仲良くなろうという気すらなくなってるとか、流石に不味いと思う。
……でも、まぁいいか。

「ねぇセイバー。セイバーは自国――――ブリテンの救済が目的なんだよね？」

「はい。それがどうかしましたか？」

「……」

本当にそれがどうかしたのかという顔だ。
国の為に己を犠牲にするセイバーは、やっぱり切嗣とどこか似てい

る。
尤も、その手段は正反対もいいところだけどね。
そしてその切嗣は視線をこっちに向けているようだけど。
「もしも、その救済が既に叶っていたとしたら……どうする？」
「何、を……言っているんですか？」
今度は目が泳ぎ、表情が崩れた。
だけど、それでも僕は聞いてみたい事がある。
「僕が使う魔法である『並行世界の運営』の事はある程度教えたから知っているよね？　で、それはそのまま並行世界の事に関しては僕とゼル爺が一番詳しいという事と同義なんだ。　それを踏まえて言うとね、ブリテンが滅びなかった世界はあるんだよ」
「……っそれでも、それでも！　……それは私であって、私ではなかった世界でしょう！？　……ならば私は、私が愚かにも滅びの道を歩ませてしまった『この世界』のブリテンの民を救うまでです！！」
「そうだね。どこで別れた道かは分からないけど、確かにそれは君であって君じゃないアーサー王が統治した世界の話だ。だけどね、セイバー。君が言った『この世界』のブリテンの救済は――――無理だよ」
「なっ！？」
流石に自身の目的自体を聖杯戦争前に、それも味方から言われたのがショックなのか、絶句し、僕を睨みつけている。

周りを見れば母さんも切嗣も早く続きを言えとばかりに此方を見守っている。

「この世界ではブリテンの滅びは既に『過去』だ。『過去』の結果を改竄するという事はその先にいる僕達は勿論、ありとあらゆる派生する『未来』をも改竄するという事になる。死ぬべき人間が生き、生きるはずだった人間が死に、結ばれるはずだった人間は結ばれず、産まれる筈だった子は産まれず」

言葉を発するたびにセイバーの顔が歪んでいく、彼女の頭の中では自分の都合で他の大勢の人間を犠牲にしてしまうという想像でもしているのかもしれない。

「でも現に『未来』として僕たちは産まれて、生きている。だから『この世界』はこのまま『過去』は変わらず時を重ね続ける。だから……聖杯によってブリテンを救済しても、それは『聖杯によって救済された並行世界』が新しく出来るだけなんだよ。それは『この世界に限りなく近いだけの世界』なんだ。故に、この世界でのブリテンが滅びたと言う事実は変わることはない」

「「「……」」」

三人が黙ってしまう。

酷いことを言っている自覚はある。

こんな事を言ってしまえば聖杯戦争前にセイバーの脱落だってありえるかもしれない。

「ハル、それでもセイバーはブリテンは滅ばない世界に行けるのよね？」

「そうだよ母さん。聖杯が正しく望みを叶えれば、ね」

今の聖杯が『アンリ・マユ』に穢されていて、負の方向に曲解して願いを叶えるという事は僕の口からは言えないし、まだ確証もない。もしかすればそれこそ近しい並行世界として違った結果なのかもしれないから。

「……それの、何がいけないのですか？　私が叶えれば、例え並行世界でも私が救いたかった世界へ導くことが出来るのでしょう？」

「本気で言っているのか？　セイバー」

声が後ろから届く。

驚いた、まさかここに来て切嗣が口を出すとは思わなかったからだ。それとも、彼女に対して思うところでもあったのか。

「どういう意味ですか、切嗣」

「……セイバー、君の言っていることはただの自己満足でしかない」

「！？」

それだけ言うと再び視線をパソコンへと戻す。

恐らく今回の対戦者の情報を整理しているのだろう。

「セイバーは聖杯に願いを叶えて貰ったら、完全に死んで英霊になるんだったよね？」

「……はい、そうです。それが成らなかった場合はカムランの丘に戻りますが」

「一体どの様に叶えられるか不明だけどさ、悪戯に救うだけ救って後は救われた民任せ――――それは本当に自己満足でしかないよ」

「ハルファス！　貴方までその様な事を言うのですか！？」

「落ち着けよセイバー。だってそうじゃないか。救った先に君は居ない、英霊になっているからね。そして結局君が言っていた『この世界』のブリテンは滅びたままだ、分岐しただけなんだからね。で、得をするのはブリテンを滅びの道へと導いてしまった後悔を持つ――――そう、君の後悔が救われて英霊になるだけだ」

「違います！　私は――――」

「――――違わない。後悔によって世界と契約をし、後悔を救われて君は英霊になる。
それはさ、セイバー。切嗣が言ったように――――

唯の自己満足以上には成り得はしないんじゃないのかな？」

目的（後書き）

はい、独自解釈ＭＡＸです。
批判コエー。

とまぁそれはさておき、ヒロインアンケートをとりたいと思います。

ハーレムにする場合は現在決定してるのがイリヤのみです。
作者的には限界でハーレム四人くらいかな、と思っています。
なので上位三人がハーレムだった場合は、そのままヒロインになります。
勿論、純愛だろゴラァァも全然ＯＫです。

1，セイバー√
2，凛ちゃん√
3，イリヤ√
4，メディア√
5，ライダー（5次）√
6，アルク√
7，桜√
8，セイバー（赤）√（えっ！？）
9，ハーレム√

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6752z/

元臆病者の辿る道

2012年1月13日00時11分発行